

第 10 回

学習院大学身体表象文化学会大会

開催日 2026 年 7 月 4 日（土）

会場 学習院大学 西 5 号館 303 教室

主催：学習院大学身体表象文化学会 共催：学習院大学文学会

大会プログラム 於：学習院大学西5号館 303教室

13:00-14:00 総会（会員のみ）

14:15-17:30 研究発表（発表：25分 質疑応答：10分）

開会の挨拶

松下茉由

学習院大学人文科学研究科 身体表象文化学専攻 博士後期課程 / 同身体表象文化学会 運営委員長

研究発表1（14:15-14:50）

宝塚歌劇における主役像

——柴田侑宏作品における人物造形に注目して

発表：久木原香澄（学習院大学人文科学研究科 身体表象文化学専攻 博士前期課程）

司会：柴田隆子（専修大学国際コミュニケーション学部 教授）

研究発表2（14:55-15:30）

『五人の斥候兵』における兵士身体のメロドラマ性

発表：魏薇（同 身体表象文化学専攻 博士前期課程）

司会：大多和朋子（同済大学外国語学院 特別招聘外籍講師）

研究発表3（15:35-16:10）

トラウマを語るということ

——映画『二十四時間の情事』と『ドライブ・マイ・カー』を巡って

発表：小堀理乃（学習院大学大学院人文科学研究科 身体表象文化学専攻 博士前期課程）

司会：岡部駿（同 身体表象文化学専攻 博士前期課程）

研究発表4（16:15-16:50）

「円」を基調とする回転舞台の構造

——舞劇『只此青緑（この青だけに）』を中心に

発表：宋李昕（同 身体表象文化学専攻 博士前期課程）

司会：岡村正太郎（同 身体表象文化学専攻 助教）

研究発表5 (16:55-17:30)

過去へと歩く馬

——初期映像装置における多重フレーム的表現について

発表：山崎翔太（同 身体表象文化学専攻 博士前期課程）

司会：岡田尚文（学習院大学 非常勤講師）

閉会の挨拶

岡村正太郎

学習院大学人文科学研究科 身体表象文化学専攻 身体表象文化学専攻 助教

18:00-20:00 懇親会（会員および同伴者のみ）



『五人の斥候兵』における兵士身体のメロドラマ性

発表：魏薇（学習院大学大学院人文科学研究科 身体表象文化学専攻 博士前期課程）

司会：大多和朋子（同済大学外国語学院 特別招聘外籍講師）

本発表は、田坂具隆『五人の斥候兵』（1938）における兵士の身体表象を、リンダ・ウィリアムズのメロドラマ論を手がかりに再検討する。先行研究は、本作を精神文化映画、ヒューマニズムを介した戦意高揚、あるいは敵の消去と沈黙する身体の政治性として論じてきた。しかし、兵士の苦痛が観客にどのような道徳的理解を促すのかは、なお検討の余地がある。そこで本発表は、善悪二元論が弱められた本作において、兵士の疲労・欠乏・涙がいかに「苦しむ身体」として可視化され、美德を読み取らせる道徳的可読性を形成するのかを分析する。具体的には、①タバコを回し吸いする場面、②徴発食糧の分配場面、③終盤の涙／「君が代」合唱場面を分析し、個人の苦痛が戦友愛や部隊内部の共同的秩序、さらに国家的秩序へ組織される過程を明らかにする。以上を通じて、本作の機能を、敵への憎悪ではなく、苦しみの可視化と観客の感情の方向づけによって成立するメロドラマ性として捉え直す。

宝塚歌劇における主役像

——柴田侑宏作品における人物造形に注目して

発表：久木原香澄（学習院大学大学院人文科学研究科 身体表象文化学専攻 博士前期課程）

司会：柴田隆子（専修大学国際コミュニケーション学部 教授）

本発表は、1960年代から2010年代まで宝塚歌劇で座付作者として活動した柴田侑宏（1932～2019）の最盛期（70年代後半～失明前までの92年）の作品における人物造形について論じる。新作主義である宝塚歌劇において柴田作品の再演率は非常に高く（全66作中30作が再演）繰り返し再演される演目も少なくない。

柴田作品について、中本千晶は『相克のタカラヅカ』（2025）で「普遍的な人間ドラマ」が内包されていると論じ、川崎賢子は『宝塚——変容を続ける「日本モダニズム」』（2022）で「細部まで劇的なものに貫かれた作品が多い」と評している。

本発表では、『あかねさす紫の花』（1976年初演）『エーゲ海のブルース』（1982年上演）を中心に分析し、60年代に上演された座付作者（高木史朗、鴨川清作ら）の作品と比較検討する。そのうえで同時代の言説・証言を確認し、先行研究が指摘している「人間ドラマ」や「劇的なもの」はいかにして構築されたのかを、登場人物の感情表出や「弱さ」を内包した性格設定に焦点を当て考察する。

トラウマを語るということ

——映画『二十四時間の情事』と『ドライブ・マイ・カー』を巡って

発表：小堀理乃（学習院大学大学院人文科学研究科 身体表象文化学専攻 博士前期課程）

司会：岡部駿（同 身体表象文化学専攻 博士前期課程）

映画『二十四時間の情事』（原題“Hiroshima mon amour”、アラン・レネ、1959）と『ドライブ・マイ・カー』（濱口竜介、2021）を、登場人物がトラウマを語る映画として比較する。トラウマという不可視の経験が、見えるものしか映さないはずのカメラを通じた映像表現として昇華される技巧を明らかにしていきたい。発表では、ここで扱うトラウマが、最も個人的な領域に属する、普遍化や典型化が不可能なトラウマの経験であることを述べてから、両者とも広島を舞台とすることに注目する。作品内に広島の前爆経験を示唆的に含みながら登場人物が自己開示をする構造が、両者とも違う方法で示されることで、登場人物のトラウマ語りが前景化している点を指摘する。次にこうした極めて内向的な語りが、再現できない過去に対する譲歩点を探る試みとして、カメラに記録可能な形式に変換されていることを主張する。最後には映像表現でなされる語りが、観る人の経験を呼び起こし、その再解釈をも促すものであることについて考えていく。

「円」を基調とする回転舞台の構造

——舞劇『只此青緑（この青だけに）』を中心に

発表：宋李昕（同 身体表象文化学専攻 博士前期課程）

司会：岡村正太郎（同 身体表象文化学専攻 助教）

廻り舞台は 18 世紀の歌舞伎において成立した舞台機構であり、その後、近代劇場文化の広がりとともに世界各地へ普及した。一方、中国では 20 世紀初頭以降、西洋劇場文化の流入とともにその概念が導入され、今日では大規模舞台作品において重要な舞台装置として活用されている。特に舞劇『只此青緑（この青だけに）』（周莉亜・韓真演出、2021 年初演）は、中国伝統絵画「千里江山図」を題材とし、画家・王希孟による創作過程を描いた作品である。回転舞台を主要な装置として用いることで、伝統絵画における「展巻」の感覚を舞台上に再現するとともに、異なる時間層や視点を接続し、名画の成立過程を一つの物語として立ち上げている。

本発表では、『只此青緑』における回転舞台に着目し、その運動が単なる場面転換や視覚効果にとどまらず、観客の視線や知覚を導きながら、物語の展開や意味生成にどのように関与しているのかを考察する。とりわけ、回転舞台が人物・空間・時間の関係をいかに再編成し、「展巻」をどのように可視化しているのかを分析することで、回転舞台が果たす表現機能を検討したい。

過去へと歩く馬

——初期映像装置における多重フレーム的表現について

発表：山崎翔太（同 身体表象文化学専攻 博士前期課程）

司会：岡田尚文（学習院大学 非常勤講師）

本発表は、初期映像装置におけるフレームと図像の配置を分析するものである。フェナキスティスコープの図案において、運動を形成する図像は〈画定された一続きの領域〉——今でいうところの「コマ」——に配置されていたわけでは必ずしもなかった。それは、〈異なる周期に分割された複数の領域〉——「多重フレーム」とでもよぶべきもの——に配置されていたのである。本発表はまず、こうした多重フレーム的表現が黎明期の装置やその図案に多く見られることを確認し、次に、後代の装置と図案において「コマ」的な表現が強まる過程を整理する。そのうえで、「コマ」的な表現が支配的なプラクシノスコープの図案において、なお馬の身体がフレームを横断して描かれることに注目し、その横断が、一方向に連続する時間を攪乱する表現として機能していることを明らかにする。最後に、以上に示した初期映像装置における時間の表現を現代のメディアアートやアニメーションに接続し、その表現が現代において、時間の流れを複数化するような実践へと再帰する可能性を示す。